

研究上の「問い」・調査における「問い」・論文における「問い」

桑畑, 洋一郎

<https://doi.org/10.15017/7388825>

出版情報 : 大学院からはじめる社会学研究 : 問いを鍛える作法 : 三隅一人教授退職記念論集, pp. 124-136, 2025-10-01. 三隅一人教授退職記念論集刊行委員会
バージョン :
権利関係 :



研究上の「問い」・調査における「問い」・論文における「問い」

桑畑 洋一郎

◎本章のねらい

研究のテーマとする事象は定まったが、それを研究していくために何をすれば良いか分からない、あるいは研究を進めるために調査をしようと考えているが調査で何を問えば良いか分からない、調査は済んだがその結果をどのように論文とすれば良いか分からないといった状況に陥ることがある。そうした場合に、それぞれの場面で何を明らかにすればいいのか（言い換えれば何をどう問えばいいのか）考えるために、「問い」を3種に分けて検討してみたい。

◎とくに読んでほしい人

研究テーマは定まり、次の段階に進もうとしています。しかし、研究上の関心は定まったもののそこからどのように何を調べればいいのか分からない状況にあります。あるいは、調査は実施できたものの、そこから得られた結果をどのように論文として組み立てていくのか、分からない状況にあります。

1. はじめに：「問い」の種類

本稿は、本論集で別に述べた研究上の「問い」とはまた異なるいくつかの「問い」に注目し、それらの「問い」相互の関係性と、それぞれの組み立て方を検討するものである。なお本稿では、桑畑（2025）で中心的に述べた研究上の「問い」に加えて、調査で組み立てられる質問である調査における「問い」、論文執筆段階で示される論文における「問い」の3種に分類し、それぞれの組み立て方と相互関係を見ていくこととしたい。

ただし本稿は、筆者がこれまで主として行ってきた質的調査と、そこで得られたデータを基にした論文執筆の経験に基づくものである。したがって、これも桑畑（2025）の最終節で述べた通り、本章の読者が筆者と異なるタイプの研究者である場合や、質的調査以外の手法を用いる研究者の場合には齟齬が生じうることを、まずお断りしておきたい。また、「こうすべき」

という規範的な話ではなく、「筆者はこうしている」という話であることもお断りしておきたい。

さて本題に入ろう。桑畑（2025）においては、リサーチ・エスチョンとしての「問い」の前段階にある「問い」の“種”に照準し、その探し方について検討を行った。そこでは、研究者個々の経験に根差した“self-centered”な問い（阿部 2024:144）につながる何かを自覚し、それを研究の「問い」に近づけていく方法を示した。一方本稿では、そうして組み立てられた研究の「問い」とはまた異なり、調査を実施する際の「問い」と、調査データを使って執筆される論文における「問い」という、2種の「問い」を検討していくこととしたい。

まずここで引っかかる読者も出てくるかもしれない。それらの3つの「問い」は別物なのか。桑畑（2025）においては、研究上の「問い」の前段階にある、「問い」の“種”をいかにして「問い」につなげるか検討した。また筆者が、「問い」の“種”から研究の「問い」を組み立てる際に意識している、3つのポイントを紹介した。これらは、研究に着手する際に、「この対象のこういう部分に着目し研究を展開していこう」と定められるものとしての「問い」の“種”と、そこから組み立てられた「問い」である。ただしこれは、調査における「問い」や、あるいは論文における「問い」とは、（少なくとも形式的には）別物である。

例えば別稿では、HTLV-1 関連疾患当事者の、臨床試験をめぐる意味付与实践に着目した研究（桑畑 2022）を例として挙げた。論文中にそれほど明示されてはいないが、この研究は、HTLV-1 関連疾患の当事者らが、臨床試験という専門性の高い領域に非専門家として関与することで、自身を取り巻く困難をじわじわと解消させようとしていることへの関心から始まっている。言うならばこの研究における研究上の「問い」は、「当事者の実践が“社会”をいかに変えうるのか」というものであったと言える。

しかし筆者はこの研究において、HTLV-1 関連疾患当事者にインタビュー調査をする際に、「あなた方の実践が“社会”をいかに変えうると思いますか」といったことを問うたりはしていない。例えば、この研究では、HTLV-1 関連疾患当事者の当事者団体を結成した方の、治験に参加する際の思いとして、「ロボットスーツだって、……もちろん私も試してみたいという気持ちもあって。……でも人のため。自分のためだけだったら試験に行っていない」（桑畑 2022: 44）という語りを引用しているが、この語りを引き出した筆者の「問い」は、（論文中ではこれも明示していないが）以下のようなものである。

何か昔ちょっとお聞きしていたのは、患者会を拡大したのは、今おっしゃったみたいに、ピアカウンセリングみたいなのも大事なんだろうけど、「これだけ患者がたくさんいますよ」というのを製薬会社なりに示して、ある意味マーケットというか需要があるよというのを（中略）すごくおっしゃってたし、で、一方で治験とかで参加することのメリットも当事者の方におっしゃっているのも見てて、大事だなと思ってましたし、何かその、治験に参加することで、もしかしたら自分の体に効く薬が出てくることもありますし、おっしゃったように今後の人のためにつながっていくこともありますからね。その辺の、治験とか臨床試験というのの捉え方というのが、次の世代にという感覚が強いんだなというのを実感しまして。

つまり、インタビューに先立つ別の機会に聞いていた話を元にして「治験とか臨床試験というのの捉え方」を語ってもらうよう水を向けた結果、先の語りが導き出されたわけである。したがって、この語りを導き出した調査における「問い」（の1つ）は、「治験・臨床試験をどう捉えているのか」というものである（この形で問うてはいないが趣旨はこうなろう）。研究の「問い」である「当事者の実践が“社会”をいかに変えうるのか」とは異なる（そもそもそんなことを口頭で尋ねられても、対象者は回答に困るであろう）。

また同様に、論文における「問い」もこれらとは異なるものとなっている。筆者はこの論文で、次のことを論文の目的として提示している。

病いの当事者は、臨床試験にどのような意味を付与しており、それはどのような背景から導き出されたのか。このことを、HTLV-1 関連疾患当事者の〈治験の語り〉を元に分析し、その意味を考察することが本稿の目的である。（桑畑 2022: 38）

したがってこの論文における直接の「問い」は、上記引用文の一文目となろう。調査で直接問うたところで回答者を困らせる「問い」であろうし、研究上の「問い」よりも具体性が高い。どちらも、関連はしているが異なるものである。

以上に明らかなように、研究上の「問い」・調査における「問い」・論文における「問い」は、当然無関係ではないものの、それぞれに違ったものとなることがしばしばある。そこで本稿では、この3つの問いを腑分けした上で、桑畑（2025）では言及できなかった、調査における「問い」との性質と、論文における「問い」の組み立て方を検討してみたい。

2. 調査における「問い」の性質：研究上の「問い」と調査における「問い」の違いと関係性

それでは、調査においてはいかなる「問い」が提示されるのか。先に述べたように、調査における「問い」は、研究上の「問い」とは異なる。とは言え当然ながら、両者が全く無関係ということはない。桑畑（2025）でも述べた通り、研究上の「問い」の“種”を組み立てる際には、3つのポイントに関連付けられるかどうかを、調査も行いながら検討するものであった。むしろ関連は強い。感覚的な記述になるが、筆者の場合、研究上の「問い」がある程度固まった後に、それを具体化・細分化する形で調査における「問い」は導き出されてくることが多い。研究上の「問い」を具体化・細分化したものが調査における「問い」で、調査における「問い」を抽象化したものが研究上の「問い」と位置付けられよう。

またさらに、後で述べることの先取にもなるが、調査における「問い」への回答として得られたデータ（筆者の場合は対象者の語り）を眺めながら、その回答と整合性があり、かつ意義のある「問い」を、逆算的に検討することで、論文における「問い」が導かれてくる。

桑畑（2022）を実例として、上記のことを見てみたい。当該論文における研究上の「問い」と、当該論文で用いた語りを導き出した調査における「問い」、及びそこから導き出された語り、当該論文における「問い」の4点を示すと、以下の表の通りとなる。なお、研究上の「問い」と調査における「問い」は当該論文で示してはいない。

表1 研究上の「問い」・調査における「問い」・導き出された語り、論文における「問い」

研究上の「問い」	当事者の実践が“社会”をいかに変えうるのか（問A）
調査における「問い」	何か昔ちよっとお聞きしていたのは、患者会を拡大したのは、今おっしゃったみたいに、ピアカウンセリングみたいなのも大事なんでしょうけど、「これだけ患者がたくさんいますよ」っていうのを製薬会社なりに示して、ある意味マーケットというか需要があるよっていうのを（中略）すごくおっしゃってたし、で、一方で治験とかで参加することのメリットも当事者の方におっしゃっているのも見てて、大事だなと思ってましたし、何かその、治験に参加することで、もしかしたら自分の体に効く薬が出てくることもありますし、おっしゃったように今後の人のためにつながっていくこともあり

	ますからね。その辺の、治験とか臨床試験というのの捉え方というのが、次の世代にという感覚が強いんだなというのを実感しまして。(問 B)
導き出された語り	ロボットスーツだって、……もちろん私も試してみたいという気持ちもあって。……でも人のため。自分のためだけだったら試験に行っていない(桑畑 2022: 44)
論文における「問い」	病いの当事者は、臨床試験にどのような意味を付与しており、それはどのような背景から導き出されたのか(桑畑 2022: 38) (問 C)

見て分かる通り、当該論文に関わる3種の問いは、形式的には異なるが、相互に全く無関係というわけでもない。関係性としては、問 A を具体化・細分化し、かつ筆者の関心の文脈やそれまでのやり取りを踏まえ会話に乗る形式にしたものが問 B である。逆に、問 B を抽象化したものが問 A であろうが、問 A が対象者に直接示されることも論文に示されることもない。問 C は、詳細は後述するが、問 B も含めたやり取りから得られた語りを、研究上の発見として論文で提示するために、それと整合性を持ち、かつ意義があるものとして逆算的に整え直したものである。

3. 往還的な調査を通した、「問い」の洗練：調査における「問い」のを見つけ方も少々

調査における「問い」の組み立て方を示すために、研究上の「問い」との関係を（また、論文における「問い」との関係も）ここまで見てきた。ただし、研究上の「問い」と調査における「問い」との間にはもう少し複雑な関係がある。

佐藤郁哉は、「実際の調査プロセスと典型的な論文の『型』とのあいだには明らかなギャップがある場合が少なくない」(佐藤 2024: 23)と指摘し、そこにある種の「ペテン」(佐藤 2024: 23)が存在すると言う。ただしこの「ペテン」は、研究不正といったものではない。特に質的調査の場合は、調査を重ねながら「問い」が徐々に明確化していくという「ジグザグな経緯」(佐藤 2024: 147)をたどることが多いのだが、それが論文になると、「問い→問いを解くための手続き→答え」(佐藤 2024: 21)という「直線的(リニア)なプロセス」(佐藤 2024: 21)で示されてしまい、「ジグザグな経緯」が見えなくなってしまうがちであるという意味での「ペテン」である。

それならば論文でも実際の流れを書けばいいではないかと思われるかもしれないが、学術論文では、スタイルとしてもそれは受容されないと思われるし（ただし筆者は実際の調査の流れを論文で書いたことはないので、もしかしたらやってみて意外と受容されるかもしれないが）、文字数制限をクリアするのはかなり困難だろう。またそもそも、後述するように研究上の「問い」も調査における「問い」も、論文における「問い」に求められるものを備えていないので、論文で示すのはそぐわない。

またあるいは、そんなに何度も調査を繰り返すことなく、最初に研究上の「問い」を確定させ、聞くべき調査における「問い」を固めてから調査に行けばいいではないかと思われるかもしれない。しかしそれも実際には難しい。

というのも、桑畑（2025）の最終節でも述べた通り、筆者は事象そのものに魅力を感じて研究に着手することが多い。したがって、調査に取り掛かった段階では、自身が研究しようとしている対象やテーマが社会的にどういう意味を持つものか、はっきりとは分かっていないことの方が多い。筆者にとって、ある事象を研究することの社会的な意味は、調査を通して徐々に発見されていくものである。

また、筆者が、インタビュー調査の中でも、それほど構造的ではないタイプのインタビューを行いがちであることにも起因しているのだろう。インタビューには、質問も回答選択肢も事前に確定させている構造化インタビュー、質問項目は事前に用意するが順序の自由度は高い半構造化インタビュー、質問項目も特に決めず自由に相手に語ってもらう非構造化インタビューと、3段階の構造化の水準があるとされる（岸・石岡・丸山 2016:53）。筆者は、質問を何も準備せずに調査に行くことはさすがにしないが、とは言え5つ程度しか質問項目を準備せず、非構造化インタビューにかなり近い半構造化インタビューを行うことが多い（ちなみに筆者は、調査をしていて「今説明が省略されたな」と感じる点や、「対象者が用いている概念は一般的なものと違う気がする」と感じる点、あるいは、「この人は今独特のことを言っている気がする」と感じる点を探すことに注力しており、そうした点があれば「今おっしゃった『**』について、もう少し説明してもらっていいですか?」「『**』って、言いかえると『++』ということですか?」といった形で、補足説明を求めることが多い）。

そうしたインタビューのスタイルが奏功して（しないこともなくはない）、新たな「問い」が見つかっていくこともある。分かっていない対象やテーマを探るから新たな「問い」も見つかるし、そもそもよく分かっていないことを探るから面白いのである。質的調査は「仮説索出」に向いており、量的調査は「仮説検証」に向いていると言われる（谷編 1996: 14）所以でもあ

るのだろう（ただし、質的調査の場合は「仮説」と表現すると誤解も生じる気も筆者はして、
て、「関心」とかそれこそ「問い」と表現した方が良いでしょうにも思う）。

ともあれ、以上のように、研究上の「問い」や調査における「問い」は、最初から確固とし
てあるわけではなく、調査を通して徐々に組み立てられていくものである。特に質的調査を行
う読者は、このことを念頭に置いて調査を繰り返すといいかもしれない。

課題 1) 調査（的な行為）に既に着手している人は、そこで得られたデータを眺めながら研
究上の「問い」の洗練と調査における（新たな）「問い」を検討してみよう。まだ調査（的
な行為）に着手していない人は、とりあえず自分の関心があるものを何かしら調べてみよう。

4. 論文における「問い」をいかに組み立てるか：新規性の観点

続いては論文における「問い」について検討する。

まず、先の表 1 を再度見てみたい。桑畑（2022）の論文における「問い」は、「病いの当事者
は、臨床試験にどのような意味を付与しており、それはどのような背景から導き出されたのか」
（桑畑 2022:38）というものであった。前節で見たことと同様、この問いもまた、研究上の「問
い」とも調査における「問い」とも異なっている。つまりここにも、佐藤の言う「ペテン」の
1 種があるわけである。

ただし、この「ペテン」もまた、研究不正といったものではなく、論文を書く際に不可避的
に生じるものである。論文執筆時にはこうした「ペテン」を回避するのではなく、「ペテン」を
採用せざるを得ないことを自覚した上で「一定の型に沿ったストーリーの作り方」（佐藤 2024:
26）、すなわち、論文における「問い」の組み立て方を考えることが重要になる。

それでは論文における「問い」をいかに組み立てるか。筆者の場合は、第 1 に新規性、第 2
に意義、第 3 に一貫性を意識しながら、論文における「問い」を組み立てることが多い。3 つ
の「型」があるわけである。それらを順に見ていくこととしたい。

新規性とは要するに、論文におけるその「問い」が、いかにこれまでの関連研究群の下で新
しいものと言えるかということである。実際に筆者は、桑畑（2022）においても、論文におけ
る「問い」を示し関連する先行研究を検討した上で、

その一方で、当事者が臨床試験をめぐって構成する意味世界を分析し、それが病いの特性とどのように結びついているのか考察する試みはほとんど行われていない。(桑畑 2022: 40)

と、自身の論文における「問い」が新規性を持つことを、「ほとんど行われていない」といった形で示そうとしている。つまり、自身の論文における「問い」がそれまでほとんど問われることがなかったものであることを、関連研究を踏まえながら示すという作業によって、「問い」を組み立てている。これが第1の「型」である。

ただし、新規性を、単に「これまでこの『問い』は（ほとんど）存在しない」ということだけで組み立ててしまうことは、避けるべきであるとも筆者は考えている。「その『問い』がほとんど存在しない」だけではなく、「その『問い』によって、自身の依拠する学問領域の議論に何かしら意義のある貢献ができる」ことも併せて示す必要があると考えるためである。この点も「問い」を組み立てる際には意識する必要がある。

例えば、本稿を執筆している2025年3月現在でも、おそらく社会学者でHTLV-1関連疾患当事者の研究をしているのは筆者のみである。そのため、単に「研究がこれまでされてきたかどうか」という意味での新規性のみを考慮するのであれば、「これまでHTLV-1関連疾患の研究は社会学では存在しない」→「だから筆者はHTLV-1関連疾患についてこの『問い』を提示するのである」で済んでしまうだろう。しかし、少し考えれば分かる通り、ある「問い」がそれまで存在しなかったからと言って、それが必然性のある「問い」であるとは言えない。「そんなこと問うてどうするの?」と言われて終わりである。つまりは、新規性だけではなく、それが問われるべき必然性を示すことが求められるのである。新規性もなければいけないが、ありさえすれば事足りるわけではない。そこで第2の「型」である「問い」の意義の検討が必要となる。

5. 論文における「問い」をいかに組み立てるか：意義の観点

論文における「問い」の意義とは要するに、その「問い」が何かに貢献しうるということを示しながら「問い」を組み立てるということである。これが「問い」を組み立てる際の第2の「型」である。

筆者は、論文における「問い」を組み立てる際に2種の意義を意識している。第1に、その「問い」が関連研究群に貢献しうる点を示すことであり、第2にその「問い」が社会に役立つ

点を示すことである。前者を学術的意義とし、後者を実践的意義としよう。いずれの意義も、前節末尾で述べた、「問い」の必然性を保証するものとなりうる。

学術的意義については、既に前節で述べた通り、「ある『問い』がそれまで存在しなかった」ということだけで保証されるものではない。「存在しなかった」とことと合わせて、その「問い」がいかに重要なのかということを示す必要がある。先と同様、桑畑（2022）において、当該論文における「問い」の学術的意義を筆者が述べた部分を引用して見てみたい。

（先の引用文に続けて:筆者注）しかしながら、「病いの語り」の枠組みに立脚するならば、語りを通して、病いをめぐる当事者の意味世界を理解することから、病いに対する社会学的理解は進むこととなる。この点において、病いの当事者にとって臨床試験が持つ意味を、その背景となる病いの特性も含めて語りを元に分析することは、社会学的に意義深い。（桑畑 2022: 40）

以上のように、「問い」の新規性を述べた上で、その「問い」が問われる必然性を、（これで完璧なものであるかどうかは別として）それが「社会学的に意義があるからである」という形で述べられている。つまり「この問いはまだ（ほとんど）問われていない」→「そしてこの『問い』にはこういう社会学的な意義がある」という論述の流れである。

またその際、「病いの語り」など、「問い」の中心的テーマ（この場合は HTLV-1 関連疾患当事者の治験をめぐる認識と運動）と直接的に関連するわけではないが、やや近接する社会学的な立場性を参照しながら意義が根拠付けられる形となっている。つまり、前段で述べた「こういう社会学的な意義がある」と述べる際に、「こういう近い立場からの社会学的研究が既にあるわけで（だがこの『問い』の中心的テーマに関してはないわけで）、であれば、同様の立場からこのことを問うと、社会学における重要な発見があるのではないか」と展開しているわけである。

一方、実践的意義は、その「問い」が社会にどのように貢献しうるかということから導かれる。例えば桑畑（2022）では、先の引用文に続けて「また加えて、臨床試験への当事者の主体的参画が進められる状況への示唆を提供しうるものでもある」（桑畑 2022: 4）と、実践的意義を示している。要するに「臨床試験をめぐる社会状況を考慮すると、HTLV-1 関連疾患当事者の治験に対する認識を理解するのは社会的に重要なのではないか」と述べようとしているわけである。

このように、それが社会に役立つことを根拠として、論文における「問い」の意義が確保されようとするのが、社会学領域の論文においてはしばしばある（佐藤 2024: 116-7）。

ただし筆者の場合は、実践的意義を強調することにやや躊躇を覚えるため、それほど強調しないことが多い。それは、『社会に役立つ』と言ってしまっているのか？という思いが拭えないからである。研究を「道具的有用性へと変換すること」（太田・浜本編 2005: 11）への危惧と、そのために『どこで、何について、誰が、どのように語っているのか』という一連の疑問を持つこと」（太田 1998: 228）の重要性が文化人類学で指摘され、あるいは、「役に立つ」かどうかを左右する社会背景自体が社会学で問われてきたこと（伊奈・中村 2007: 118-28）が念頭にあるからである。「この研究は社会に役立つ」との主張が、一体どのような立場から出ているのかというのが気になってしまうのである。したがって、実践的意義も全く書かないわけではないが、学術的意義の方に力点を置きながら、「問い」の意義を根拠づけようとする傾向が筆者にはある。

6. 論文における「問い」をいかに組み立てるか：整合性の観点

「問い」を組み立てる際の3点目の「型」が、整合性という観点である。要するに、調査における「問い」から得られた回答（発見）と、論文における「問い」とが整合しているかどうかということである。

3節で述べたように、特に質的調査の場合は、研究・調査に着手した段階で、研究上の／調査における「問い」が確固とした形にはなっていない場合も多く、論文における「問い」はまだ形もないような状況であることの方が多い。したがって当然まだ何が発見されるかわからない状況で研究・調査が開始され、徐々に面白いもの（表1の「導き出された語り」がその1つ）が発見されていくのが、実際の研究・調査の流れである。

しかし、先に参照した佐藤郁哉の指摘にあるように、論文の形式は一般に、「問い→問いを解くための手続き→答え」（佐藤 2024: 21）という流れで記述されがちである。そのため論文化された際は、あたかも最初から、研究上の／調査における／論文における「問い」が明確に持たれており、そこから回答が一直線に手に入れられていったように（さらには、実際に存在する往還的なプロセスは非明示的なままで）記述されることが多い。

研究・調査を通して面白そうな発見が得られ、それをさらに掘り下げるために研究上の／調査における「問い」が徐々に明確化され、さらに発見が蓄積された上で、ようやく論文が執筆される（論文における「問い」が提示される）ことになるのが実際の流れである。したがって、

論文における「問い」の確定よりも、回答（面白そうな発見）の入手の方が先立つのであるが、論文の記述上の流れとしては、論文における「問い」がまずあり、それに基づいて研究・調査が展開された結果として回答が得られた、という形になる。

このように、研究・調査の実際の流れと、論文における記述上の流れとの逆転があるため、論文を執筆する際には、回答と「問い」との間に齟齬が生じやすい。回答を導き出したのは、論文における「問い」ではなく調査における「問い」であり、そもそも調査時には論文における「問い」はまだ存在していないのだが、にもかかわらず、論文における「問い」から回答が導かれたかのように記述する必要があるためである。そこで、先に入手している回答と整合性のある形となるよう逆算しながら、しかも逆算したことが見えないようにしながら、論文における「問い」を組み立てることを意識することになる。これが第3の「型」である。

この、整合性を保つための具体的な方策として、筆者は、論文における「問い」を示す「はじめに」や「序論」の部分は仮置きの書き置き、いったん論文を書き上げた後で、「分析」や「考察」といった回答を提示する部分と整合するように、「はじめに」や「序論」を書き直すことが多い。ちなみに、こうした方策を採用している社会学者（特に質的調査を行う社会学者）は筆者以外にもいるようである（佐藤 2024; Becker 1986=1996）。

課題 2) 論文を書こうとし始めている人は、調査から得られた面白そうな結果＝論文中で最も論じたいことを念頭に置きながら、論文における「問い」を組み立ててみよう。まだ調査から面白そうな結果が得られていない人は、さらに調査を行おう。まだ調査（的な行為）に着手していない人は、とりあえず自分の関心があるものを何かしら調べてみよう。

7. おわりに：再度のお断り

本稿では、「問い」を、研究上の「問い」と調査における「問い」と論文における「問い」の3種に腑分けした上で、相互の関係性と、調査における「問い」と論文における「問い」の組み立て方を検討してきた。そこには確かに「ペテン」が潜んではいるが、この「ペテン」は回避されるべきものではなく、それを分かった上で「型」を習得することの方がむしろ必要であるという前提の下、筆者にとっての「型」を示してきた。

ただし冒頭でも述べた通り、筆者は事象先行型の研究者としての性格が強く、本稿で見てきた筆者がやっていることというのは、そうした筆者の志向から導き出されている側面があるのは否めない。また、研究者としての性格のみならず、量的調査を行う研究者にも適用されない

ことであるとも思われるし、当然社会学者でなければまたかなりやり方は変わってくるだろう。そういう意味も含めて、本稿で見えてきたことは規範的な話ではなく、「筆者はこうやっている」という話として、その範囲内で参考にしていただければ幸いである。

文献

阿部幸大, 2024, 『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』 光文社.

Becker, H., S. and Pamela Richards, 1986, *Writing for Social Scientists*, Chicago: University of Chicago Press.

(佐野敏行訳, 1996, 『論文の技法』 講談社).

伊奈正人・中村好孝, 2007, 『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の視点から』 世界思想社.

岸政彦・石岡丈昇・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法——他社の合理性の理解社会学』 有斐閣.

桑畑洋一郎, 2022, 「病いの当事者にとって臨床試験とは何か—— HTLV-1 関連疾患当事者の〈治験の語り〉から」『社会学評論』 73(1): 37-54.

———, 2025, 「研究上の『問い』の“種”を見つけ、『問い』を組み立てる」『大学院から始める社会学研究』, 第9章.

日本医療研究開発機構, 2025, 「研究への患者・市民参画 (PPI)」(2025 年 3 月 25 日取得, <https://www.amed.go.jp/ppi/>).

太田好信, 1998, 『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』 世界思想社.

太田好信・浜本満編, 2005, 『メイキング文化人類学』 世界思想社.

佐藤郁哉, 2024, 『リサーチ・クエスチョンとは何か?』 筑摩書房.

谷富夫編, 1996, 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』 世界思想社.